協同で「問い」を追究するレポート作成の試み

佐藤広子（目白大学）

キーワード：レポート、問い、アウトライン、プレゼンテーション

１、はじめに

大学の基礎教育課程でレポートの書き方を教える授業は広く行われている。しかし、教師が書き方を教え課題を提出させたとしても、学生は単位のために体裁を整えるだけで、必ずしも思考を深めているとはいえない現状がある。

レポートは、簡単に言ってしまえば、問いを立ててそれに答える思考の道筋を書くものである。どのような問いを立てるかでレポートの良し悪しが決まると言っても過言ではない。学生が問いの重要性を意識し、思考を深めるにはどうすれば良いか。

本発表では「表現演習Ⅱ」の授業における協同で「問い」を追究するレポート作成の試みについて報告する。

２、授業の概要

研究対象とするのは、2015 年度春期に行った「表現演習Ⅱ」の授業内容である。

筆者が担当したのは、以下の学部学科である。（数字は受講人数、／の後は学科を示す）経営学部／経営 29、社会学部／地域社会 26・社会情報 30、外国語学部／日本語・日本語教育 37、英米語 28、計 150 名

「表現演習Ⅱ」は２年生の全学必修科目であり、学生の学習目標として、以下の３点が挙げられている。

１．論理的な文章を書くために必要な複眼的思考法、批判的思考法を身につける。

２．自己表現のために必要な実践的な技術を身につける。

３．社会に出て通用するような口頭発表能力を身につける。

この目標を達成するための具体的な活動として、10 回目にレポートを提出し相互批正をすること、11 回目に修正レポートを提出すること、12 回目以降にプレゼンテーションを行うことをあらかじめ提示し、それに向かって計画的に作業を進めるように促した。レポートは 2000 字以上 4000 字以内でテーマは自由とした。

初回ガイダンスで以下の２点を授業ルールとすることを宣言し、毎時間の活動がルールに基づいて行われるよう配慮した。

１．コミュニケーションの基本は、傾聴、共感、承認であると心に刻むこと

２．教室は互いに啓発し合い、創発する空間であると認識すること

毎回の授業は、次のサイクルで行うことを基本とした。「ミニレッスン」とは、レポートを書いていく上で必要な技法を教師が教えるパートである。

前時の振り返り（A4 両面印刷）を問題意識を持って黙読する(3 分)→読んで考えたことをグループで話す(5 分)→グループ代表が発表する(12 分)→ミニレッスン(10 分)→活動の時間(35 分)→自己 PR の時間(15 分)→振り返りシート記入(10 分)

３、「問い」を追究する協同学習

３回目のミニレッスンで文献検索の仕方を扱い、ゴールデンウィーク中に追究したい「問い」を考えてくることを課題とした。４回目はペアで途中経過を確認し、５回目にグループワークで互いの「問い」を深めるために質問し合った。さらに、レポートで扱う予定の「問い」をグループ毎に全員分板書し、グループ間で公開の質疑応答を行った。文献を読み進めている学生とそうでない学生とでは、「問い」の立て方に歴然とした差が表れた。以下は、５回目の振り返りシートの記述例である。

①他の班の人から質問された時に、事例だけしか答えられず、どう影響していたのかまで答えることができなかった。自分の問いをもっと深めて、納得できるようなレポートになるように調べていきたいと思った。また、私は新書の情報と何か参考になる本から調べていこうと思っていたけれど、人に聞いて調査しようとしている人がいたので、私も他の手法がないか考えてみようと感じた。

②今日は質問するということの持つ力を強く実感した。それは「暴く力」なのだと自分は思う。何となく決めた、その場で思い浮かんだから決めた、実はよく知らないけど決めた、そんなことが質問によって何回も暴かれていた。

③今回で自分の問いをさらに深く考えることができた。どのような疑問を持ってレポートに臨むべきなのかを少し理解できたと思う。また、他の人の「問い」を聞くことで物事を考える時の視点をどこに置くかということが分かり、とても参考になった。

４、結果と課題

「問い」の重要性を意識させる取り組みは、その後アウトラインを何度も書き直すことに発展し、レポートの質を高めることにつながったと考えられる。

期末に行ったアンケート調査では、「レポートにおいて問いの重要性を意識した」という項目に対して、136 名中 66 名が「当てはまる」、57 名が「少し当てはまる」と回答している。期末振り返りにおいても「問い」やアウトラインに触れる記述が多く見られた。

成果物のレポートについては、早くから明確な問題意識の基に問いを立てていた学生のものは読み応えがあった。しかし、全体としては引用の方法に難があるものが散見され、引用に関して指導法を工夫することが課題として残った。プレゼンテーションについては、「問い」を明確にした上で結論に至る道筋を説明できている学生が多かった。